

2021年7月26日

ユニットテーマの策定

吉田善章

ユニット構築へ向けた議論は、中間段階に入りつつあります。「ユニットテーマ」はこれからのNIFSのアイデンティティを表現するものになります。核融合科学の未来を照らすユニットテーマを練り上げるために、アドバイザーの意見を取り入れながら検討するプロセスを設けます。ユニットテーマができると、次はユニットの「組織」を構築する段階に進むこととなりますが、今はまず、組織論を始める前に、何を研究するのか、その意義と可能性を問いながら、ユニットテーマの策定に注力しましょう。

ユニットテーマとは、私たち自身で私たちの「目標」を表現するキーワードです。目標を定めること、すなわち課題を「定式化」することは、研究者が最初に知恵を絞るべきことであり、最も重要なプロセスです。だれかに指示された目標、すなわち「宿題」に取り組むという受動的な研究ではなく、自らがテーマ化した問題を主体的に研究する組織であってほしい、私はこの願いを『所長としての所信』として就任時に表明しました。このような試みに、これだけの情熱をもって取り組んでいる研究所は他にないと思います。また、研究所の変革に所外から積極的なコミットメントを得ていることも有り難いことです。決して容易ではない挑戦です。もし道に迷ったら『所長としての所信』を再度参照し、この難題に取り組む意味を確認してもらいたいと思います。

これまでに多くの「種」が皆さんによって持ち寄られました。これらの種を「掛け合わせる」ことで新しい種（個々では思い付かなかったテーマとしてのユニットテーマ）を生み出すというように考えてもらいたいと思っています。掛け合わせるとは、単に寄せ集めるのではなく、個別のテーマに対してメタのレベルにあるテーマに注目する（例えば、多様性に対して、そもそも多様性を特徴づけているのは何かを問う）、あるいは逆に、個別のテーマを分解して深層のレベルにある概念は何かを考える（例えば、原子核を分解して核子の成り立ちや結合原理を問う）というアプローチのことです。

ユニットテーマに求められる条件として次の四項目を検討してください：

1. 未来志向であること（既存のテーマの後追いでない）
2. 目標を具体的に示していること（永遠のテーマでない）
3. 10年後に学术界に輝くテーマに育つこと（月並みでない）
4. 多様な「個人のテーマ」を包摂できること（独りよがりでない）

これらについて反省的に考えるための指標は「声がどれほど遠くまで響くか？」ということです。例えば、学术界に輝くという主張が、ヘリカル専門家には通じるけれどトカマクの専門家は納得しない、というのでは失格です。最も素晴らしいのは、物理学者はもちろん生物学者、あるいは社会学者までもが納得してくれるというレベルです。そこまでは難しく

も、理工学分野の人なら「そうだ」と言ってくれるところを目指してください。

このたび提案していただくのは「ユニットテーマ」であり、ユニットの組織案ではありません。テーマの策定は学問論です。これと組織論とは厳密に分けて考えなくてはなりません。学問的可能性と組織化可能性とは別次元の問題だからです。学問的に魅力あるテーマでも、その研究を実施可能な組織が実現できるかどうかは分かりません。それは次の段階で議論します。逆に組織ができて、つまらないテーマを研究する羽目になっては意味がありません。組織は、全く違う論理でいくらでも作ることができます。そこにテーマを後付けすると、学問論を歪めてしまいます。例えば、これまでにあがっているテーマの候補から適当な「共通項」を見つけてユニットテーマとすると、それは単なる寄せ集めです。楕円のモチーフの共通焦点は、“and”でも“or”でもありません。前記のように、メタのレベルにあるもの、あるいは深層のレベルにあるものとして幾つかの課題を束ねるテーマです。

優れたユニットテーマをもつことは、皆さんのこれからの研究活動にとって極めて重要なことです。そのために、アドバイスを活用し、ユニットテーマを磨き上げてください。良い提案を期待しています。